

# 橋渡し英語語彙集試論

友 澤 宏 隆

## 〈Abstract〉

Bilingual dictionaries are primarily concerned with supplying translational equivalents for words and phrases in the language described, making them insufficient for learners to function in that language. This note is an attempt to describe English words in a more explanatory and thus more helpful manner than do popular English-Japanese dictionaries. The goal is to give Japanese learners a sense of how native speakers of English understand their language, something they are not likely to get simply by learning accepted native-language equivalents.

## 1. 序説

外国語の語彙の学習の際に主として参照されるのは外国語と母語の二言語辞書 (bilingual dictionary) である。二言語辞書は限られた紙幅に多くの情報を盛り込まねばならないため、見出し語は簡潔な語義／訳語とともに提示されるのが一般的であるが、その二つの言語の語彙の構造の間に完全な平行性が存在しない限り、そのような訳語のみに依存した原語の理解・運用には自明な限界がある。たとえば英語の describe, explain は『ジーニアス英和辞典第5版』ではそれぞれ「(人に) (人・物・事) の特徴を述べる, 説明する, 話す」「(人・報告書などが) (物・事) を (人に) 説明する」と定義され、次のような例文が挙げられている:

- (1) The video describes how to use the machine.  
(ビデオがその機械の使い方を説明している)
- (2) I explained the process to him.  
(その過程を彼に説明した)

これらの記述から describe, explain という英語が「説明する」という日本語に対応することはわかるが、運用に重点を置いた語彙の習得という観点からするとこの説明では十分とは言えない。言語の運用のためには母語話者と同様の言語知識を共有

していることが理想であるが、日本語の訳語と同じ意味内容を持つものとして英語母語話者がこれらの語をメンタル・レキシコンに登録しているとは限らないからである。

本稿では、英語の表現の意味用法の実態に基づいて学習英和辞典に記載された内容を補い、英語母語話者の言語感覚への橋渡しを試みることによって、日本語母語話者の英語の語彙習得の一助となることをめざす。このような辞書の補完は小西(1980)などに代表される語法・類義語の辞典や一般向けの語法文法書などがその役割を担っているが、ここではいくつかの語について確立されたものを超えた意味解釈・意味分析・訳の提案を行なうとともに、従来はあまり一般的でなかったその非概念的内容の表示——英語母語話者がその表現を用いる際の思考や気持ちをそのままインフォーマルな日本語で表したのもの——も適宜採り入れた記述を行なう<sup>(1)</sup>。以下ではアルファベット順に各語を具体的に見ていくことにする。

## 2. 訳語から母語話者の言語感覚へ——橋渡し英語語彙集の試み

### about

about は前置詞として「……について (の), ……に関して, ……に関する」(ジー) の意味で用いられるが、「(活動・仕事などの目的・本質を示して) ……するということだ」(ジー) という意味でも用いられる。about は around と同様「……のまわりに」が基本義であり、それから転じて S is (all) about A の形で「S の核心／中核／中心／本質／本質的目的が A である」という意味を表す<sup>(2)</sup>：

- (3) Movies are all about making money these days. (OALD<sup>9</sup>)

(最近では映画の目的は金儲け中心になっている／金儲け中心主義になっている)

- (4) Christmas is not about presents, but about the birth of Jesus.

(クリスマスはプレゼントを交換する (ための) 日ではなく、イエス・キリストの誕生を祝う日である)

- (5) MUJI's products are not about being inexpensive, but giving good quality at the minimum price. (Web)

(MUJI の製品は安さがウリなのではない。よいものを最低価格で提供するのが MUJI の製品なのである)

(3) は S の本質的目的が A であることを述べており、(4)(5) はいずれも S の中心

的要素が A であるかどうかについて述べている。次の例はどうであろうか：

(6) Our job is (all) about guarding the place. (ジー)

(私たちの仕事はその場所を警備することです)

(6) は日本語訳からは about の意味が見えにくい、S の中核的要素が A だということであり、これは前者の「定義 (definition)」が後者であるということもできる<sup>(3)</sup>。A が S の定義を表すという関係は、次の場合にも成り立つ：

(7) Democracy is about majority rule and minority rights. (Web)

(民主主義とは多数決と少数者の権利の尊重である)

(8) Friendship is about understanding people regardless of their backgrounds. (Web)

(友情とは人々の背景にかかわらず人々を理解することである)

この (7)(8) のような場合は、S is about A は「S とは A である」と訳すのが適当である。

### affect

動詞 affect は「(事・状態などが) (物・事・人) に影響する、作用する」「(病気などが) (人・体) を冒す、襲う、感染させる」(ジー) と定義されている。この場合の「影響・作用」は好ましくないものであることが多く、そのような場合 S affects A において S と A は「好ましくない事柄」と「その受け手」という関係になる<sup>(4)</sup>。S が「病気 (など)」である場合は A は「その患者あるいは患部」である：

(9) Suicide affects everyone.

(誰でも自殺する可能性はある)

(10) The condition affects one in five women. (OALD<sup>9</sup>)

(その病気は女性の 5 人に 1 人がかかる／罹患する病気である)

(11) Sudden death affects about one in 200,000 high school athletes a year. (Web)

(毎年高校の運動選手 20 万人のうち約 1 人が突然死に見舞われる／突然死する)

また、次のような場合は「加害事象」と「被害者」の関係を表していると考えることができる：

(12) Cyber harassment affects about 20% of young people in Australia.

(Web)

(オーストラリアでは約2割の若者がサイバー・ハラスメントの被害に遭っている)

(13) Bike theft is a common crime on campus that affects many students.

(Web)

(自転車の盗難はキャンパスでよくある犯罪で、多くの学生が被害に遭っている)

これらからわかるように、動詞 affect は「……に影響を与える、……を冒す」などの訳語では不十分な場合が少なくない。

### available

形容詞 available は「(……に／……のために／……するために) 入手できる, 購入できる, 利用できる」「(人が) (手があいて) 会う [来る] ことができる」(ジー) と定義されているが, この語は「(相手・他者から) 求められたとき, それに応じられる／応じる用意がある」という意味合いで用いられることが多い。次の例を見てみよう:

(14) English menu available.

(英語のメニューあります)

(15) Tutor available.

(家庭教師やります)

これらは掲示などでよく見られる表現であるが, (14) は「英語のメニューはありますか。あれば見たいんですが」と言われたら「あります」と応じられるということであり, (15) は「家庭教師をやってもらえますか」と言われたら「わかりました。(喜んで) やらせていただきます」と言うということである。次の例も同様に考えられる:

(16) I'm available next Monday.

(来週の月曜日は大丈夫です)

(17) We are always available and ready to help you.

(ご相談はいつでも受け付けます／承ります)

(18) We are always available and willing to answer your questions.

(ご質問はいつでも受け付けます／承ります)

(16) は「来週の月曜日は都合はいいですか／会っていただけますか」と聞かれたら「大丈夫です」と言って応じるということであり, (17)(18) は「もし相談／質

問があればいつでも応じる用意がありますので、何でも自由に相談・質問してください」ということである<sup>(5)</sup>。

### challenge

動詞 challenge は「(発言・行為など)の妥当性を疑う、(人)が……することに異議を唱える」「(人)の能力〔技量〕を試す」(ジー)という意味で用いられるが、これは対象に対して「それはおかしいんじゃないか」「どうだまいったか、やれるものならやってみろ」という気持ちを表していると考えると理解しやすい。次の例を見よう：

- (19) This discovery challenges traditional beliefs. (*OALD*<sup>9</sup>)  
 (この発見は「今まで人々が信じてきたことは間違っていたんじゃないか」と思わせるものである)
- (20) A number of doctors are challenging the study's claims. (*MWALED*)  
 (多数の医師たちが「その研究が言っている事柄はおかしいんじゃないか」と言っている)
- (21) Cognitive linguistics is a relatively new theory of language that challenges many of the basic assumptions of traditional approaches.  
 (Lee 2001：裏表紙)  
 (認知言語学は「伝統的な言語学のアプローチの基本的な仮定の多くは実はおかしいんじゃないか／成り立たないんじゃないか」と主張する比較的新しい言語理論である)
- (22) The job doesn't really challenge her. (*OALD*<sup>9</sup>)  
 (その仕事は彼女にとっては大した仕事／やりがいを感じるような仕事ではない(「やれるものならやってみろ」と言われて意欲的に取り組むに値するほどのものではない))

challenge は名詞としても用いられる。この場合「(能力・技量が試される) 試練、難題、難問、チャレンジ」(ジー)などと訳されるが、その意味は動詞の場合と平行したものである。次の例を参照：

- (23) Schools must meet the challenge of new technology. (*OALD*<sup>6</sup>)  
 (「使えるものなら使ってみろ」と言わんばかりに新たに登場してくるテクノロジーを学校は何とかうまく使いこなしていかななくてはならない)
- (24) I'm taking a challenge to go vegan for a week. (Web)

「1週間菜食オンリーでやれると思うのならやってみろ」「よし、やってみる」ということで菜食にチャレンジしている)

- (25) The challenge is to find new ways to lower sugar, salt and calories in snack foods and beverages. (Web)

(「やれるものならやってみろ」とわれわれに突きつけられている課題は、スナック食品や飲料の糖分・塩分・カロリーを減らすことである)

- (26) It is important to get this information out to people who are suffering the challenges of diabetes. (Web)

(糖尿病に(「どうだまいったか」と言われて)まいていて／悩んでいる／困っている人たちにこの情報を伝えることは大切である)

### choose

動詞 choose は「いくつかの選択肢の中から一つに決める」(ジ-) という意味であるが、choose to V の形は「よりによって／あえて／好きこのんで／自分の意思で V する、別にそうしなくてもいいのに V する」という意味合いで用いられることが多い。次の例を参照：

- (27) We chose to go by train. (OALD<sup>9</sup>)

(われわれは(車で行くこともできるけれども／普通なら車で行くけれども／列車で行く必要はないけれども)よりによって／あえて列車で行くことにした)

- (28) A volunteer is someone who chooses to join the armed forces, especially during a war, as opposed to someone who is forced to join by law.

(Collins)

(法律によって入隊を強制される人に対して、志願兵とは、特に戦時において(別に入らなくてもよいのだが)軍隊に入ることを選ぶ人のことである)

- (29) Why I Choose To Remain Single (Web)

((結婚することもできるけれども／独身である必然性はないけれども)私があえて独身である理由)

- (30) No one chooses to get sick, but refugees choose to come to this country. (Web)

(好きで／好きこのんで／自分の意思で病気になる人はいないが、難民が

この国にやってくるのは彼らの意思による選択である)

これらの場合、choose to Vは単に「(いくつかの選択肢の中から) Vを選ぶ」というのではなく、選択の対象となるVが主体の好みに合致したものである点に重点を置いていると言える。

### confirm

動詞 confirm はその意味について「(人・事・物が) (陳述・証拠など) を (本当だと) 示す, 確認する, ……の間違いのないことをはっきりさせる, (予約・約束など) を確認する」「……ということを [……かを] 裏づける」「(人・話などが) (決定・信念など) を固める, (人の) (決意・意見など) を強める」(ジー) などの記述がある。定訳が示しにくい語であることが示唆されるが、S confirms A の意味を特徴づけると「A の事実性／真実性が不確かである／疑われている／問題にされているとき、S が何らかの証拠を与えたり発言をしたりして A の事実性／真実性をより確かな状態にする」ということになる。次の例を見てみよう：

- (31) The rumor that the President is resigning is not confirmed. (*Newbury*)  
(大統領が辞任するといううわさがあるが、それが事実であるという確かな証拠はない)
- (32) The new evidence has confirmed the first witness's story. (*LDCE*)  
(最初の目撃者の話が真実かどうか問題になっていたが、その新たな証拠が出てそれが真実である可能性が高まった)
- (33) Walsh confirmed that the money had been paid. (*LDCE*)  
(「その金は支払われていないのではないか」という疑いに対して、ウォルシュは「その金は(間違いなく)支払われましたよ」と言った)
- (34) Please write to confirm your reservation. (*OALD*<sup>9</sup>)  
(あなたは予約をされていますが、その内容が確かであること／それを取り消すつもりがないことを書面でお知らせください)<sup>(6)</sup>
- (35) On Friday, Mr Miyazaki confirmed he had an affair and said he was stepping down as MP for Kyoto prefecture. (*BBC (Web)*, 16 February 2016)  
(金曜日に、宮崎氏はうわさされていた女性との関係についてそれが事実であることを認め、京都府選出の国会議員の職を辞すると述べた)

(35) のような場合は、「報道されていた事柄について当事者・関係者に問い合わせたところ、その当事者・関係者がそれが事実であると答える」ということで、「(報

道内容)を認める／肯定する」と訳すことができる。

### describe

動詞 describe は「(人に) (人・物・事) の特徴を述べる, 説明する, 話す」「(人・物が) ……かを述べる」「(人・物・事) を……だと言う, 称する, 表現する」「……する様子を述べる」(ジー) と説明されているが, この語は「ある対象(人・物・事) がどのようなものであるかを, ありのままに述べる」というのがその本質的意味である。次の例を参照:

(36) Can you describe him to me? (OALD<sup>9</sup>)

(彼はどんな人か私に教えてくださいか／彼の特徴を私に教えてくださいか)

(37) Jim was described by his colleagues as 'unusual'. (OALD<sup>9</sup>)

(「ジムはどんな人ですか」と同僚たちに聞くと, 同僚たちは「変わった人だよ」と言った)

(38) Describe your province in your terms.

(自分の州がどんな所かを自分なりに述べてみてください／紹介してください)

これらの describe は上述のように「……を説明する」と訳すこともできるが, 日本語の「説明する」が「明らかでない事柄を明らかにする」という意味であるのに対して, describe は「その対象のありさまを忠実にことばで描写する／形容する」ということである。describe 自体が何かを明らかにする行為であるのではなく, describe した結果として何かが明らかになるということである。

### dispute

動詞 dispute は「(提案・問題など) に強く反論 [反対] する」(ジー) の意味で用いられるが, この語は通常「ある事柄の事実性／正当性について, 何らかの強い確信や根拠に基づいて異論を唱える」という場合に用いられ, 「それはおかしい／そんなはずはない」という気持ちを表す。次の例を参照:

(39) The election result was disputed. (OALD<sup>4</sup>)

(選挙の結果について「その票数はおかしい／そんなはずはない／本当に正しく票を数えたのだろうか」という声が上がった)

(40) The family wanted to dispute the will. (OALD<sup>9</sup>)

(その家族はその遺言状の内容について「これはおかしい／そんなはずはない／この遺言状は本物だろうか」といってその内容の正当性を疑い、異議を申し立てる意向を示した)

- (41) The usual attribution of the work to Leonardo is now disputed by several experts. (CALD)

(通常その作品はレオナルドの作であるとされているが、「本当にそうだろうか／そんなはずはない」と何人かの専門家がそれに異論を唱えるようになっていく)

- (42) I need to dispute a credit card bill. (Web)

(クレジットカードの請求書を見て「これはおかしい／こんなに使っているはずがない」と思う／異議申し立てをしたいと思う)

- (43) If a student wishes to dispute a grade, he or she should contact the Instructor. (Web)

(成績に異議がある場合は／「こんなはずはない／こんな悪い成績であるはずがない」と思う場合は担当教員に連絡すること)

このように dispute は、「対象への疑いの表明」という点で上述の challenge の意味用法と重なっていると言える。

## explain

動詞 explain の意味は「(人・報告書などが) (物・事) を (人に) 説明する」「(人が) (不本意な結果 (の理由)) を弁明 [釈明] する」「……だと [……かを] 弁明 [釈明] する」「(物事が) ……の原因を説明する, ……の説明となる」(ジー) などと記述されるが, S explains A において重要なことは、「説明の主体」である S が「説明の対象」である A について十分な知識と理解を持っていて, それについて知識・理解を持っていない人に対して「(これは) …… (ということ) なんですよ／……だから…… (というわけ) なんですよ」という気持ちで説明するということである。次の例を見てみよう:

- (44) The guide explains how to identify edible mushrooms. (LAAD)

(ガイドさんが「食用キノコはこうやって見分けるんですよ」と教えてくれます)

- (45) Can you explain how to use the microwave?

(この電子レンジの使い方がわからないので教えてもらえますか。あなた

はその使い方をよくご存じだと思うので)

(46) He explained the proverb in detail.

(彼は「この諺はこういう意味なんですよ」と詳しく教えてくれた)

これらにおいて、S explains A の S は A について十分な知識・理解を持っており、それについて知識・理解を持っていない／いなかった相手は S の説明を聞いて「ああそうだったんですか、なるほどそうなんですか」と納得すると考えられる。これに対して次の例では、十分な知識を持った専門家である S (“T”) が説明してもそれを聞き入れない人がいることが述べられている：

(47) I've had patients refuse antidepressants I know would be likely to help, because they've read online that they will cause weight gain, even when I explain it's highly unlikely.

(*The New York Times* (Web), March 1, 2018)

(飲むときと効果があると思う抗鬱剤を出したら患者に拒否されたことがあります。なぜかという、「それを飲んだら太るとウェブに出ていた」と言うんです。私が「太る可能性は非常に低いんですよ（だから飲んでも大丈夫ですよ）」と言っても聞いてくれないんです)

S explains A は A (=説明の対象) が「ある出来事の原因・理由」である場合がある。次の例を参照：

(48) Alex explained that his car had broken down. (*OALD*<sup>9</sup>)

(アレックスは「なぜ遅れたかと言うと、車が故障してしまったんです／車が故障してしまったからなんです」と言った)

この場合、A は「遅れてしまったという出来事」の「原因・理由」を表している。この A の内容はその出来事の背景的な事情であるが、S (“Alex”) はそれについて十分に知っており、そのことを知らない相手に説明したということである<sup>(7)</sup>。

### guess

動詞 guess は「……と [……かを] 推測する」「(主に米略式) (根拠はないがなんとなく) ……だと思う」(ジー) という意味で用いられる。「不確実な根拠に基づく推測」を表すこの語は、その気持ちを述べれば「よくわからないんだけど、……じゃない？ よくわからないけど」のような感じである<sup>(8)</sup>。次の例を参照：

(49) I guess (that) it will rain tomorrow. (ジー)

(明日は雨になるんじゃないかな。よくわからないけど)

- (50) “Do you think he’ll be promoted?” “I guess not. (ジー)  
 (「彼は昇進すると思いますか」「無理じゃないですかね」)
- (51) I’d guess that she’s about 30. (*OALD*<sup>9</sup>)  
 (私は彼女は30歳ぐらいじゃないかなと思います)
- (52) “Are you ready to go?” “Yeah, I guess so.” (*OALD*<sup>9</sup>)  
 (「もう行けますか」「ええ、まあ」)

(52) の場合、「行くことができる(心の)準備ができているかどうかわからない／確信が持てない」ということから、「自分は本当は行きたくない」という気持ちであることを示している<sup>(9)</sup>。

### identify

動詞 identify は「(人・物)を(同一人[物]であると)確認する、……(の身元)を特定する」「(人・物)を……であるとわかる、確認する」「(物・事)を突き止める、特定する」「(服装・特徴などが)……を……だと見分けるのに役立つ、(服装・特徴で)……が……だとわかる」「(動植物)の種[属]を同定する」(ジー)などと記述されている。上述の confirm と同様定訳が示しにくい(したがって、意味が捉えにくい)語であると言えるが、この語の意味を分析すると「言語外の事物 X と可能なカテゴリーの集合  $A_1, A_2, \dots, A_n$  があるとき、主体である S が X が属するカテゴリー A を  $A_1, A_2, \dots, A_n$  の中から選択して抽出する」ということである。この場合表現の型としては S identifies X as A, S identifies X, S identifies A の3つがある。次の (53)–(56) のうち、(53) は S identifies X as A, (54) は S identifies X, (55)(56) は S identifies A の例である：

- (53) The bodies were identified as those of two suspected drug dealers.  
 (*OALD*<sup>9</sup>)  
 (それらの遺体は鑑定の結果、麻薬密売の容疑者2人のものと確認された)
- (54) He was able to correctly identify the mushroom. (*MWALED*)  
 (彼はそのキノコの種類が何であるか正しく判断することができた)
- (55) They began identifying XYY babies. (中村 2002: 341)  
 (XYY 染色体の幼児が発見されるようになった)
- (56) It is not often that one can identify a seminal figure in contemporary political thought or in one’s own life. (最所 1981: 25)  
 (現代政治思想の中で、またはわれわれ自身の生涯の中で、独創的で感化

力に富む人物に遭遇することはまれである)

identify の表現型の中で、S identifies X の型は「言語表現」とその「指示対象」の関係を表すのにも用いられる。次の例を参照：

- (57) We use words to identify concepts. (Web)  
 (われわれは概念を識別する／区別する／指し示す／表すのに語を用いる)
- (58) Humans make use of words to identify persons, places, things, feelings, ideas and more. (Web)  
 (人間は人・場所・物・感情・観念などを識別する／区別する／指し示す／表すのに語を利用する)

これらの場合、A に相当するのは“words (語)”であり、「X に (「語 (words)」に対応する) A という名前をつける」と言ってもよい。

また、同じく言語表現とその指示対象に関係する別の表現として、identify の関連語が文法用語の一部として用いられている次のようなものがある：

- (59) identifying relative clauses (制限的／限定的関係節)
- (60) non-identifying relative clauses (非制限的／非限定的関係節)
- (59) は可能な指示対象の集合の中から指定条件に合致するもの (=A) を特定して抽出する機能を持つ“relative clauses (関係節) (=S)”ということであり、「指示対象特定・抽出型関係節」と言うことができる。(60) はそのような機能を持たないもので、「指示対象非特定・非抽出型関係節」ということである<sup>(10)</sup>。

## know

動詞 know は「……を知っている、……に気づいている」という一般的な意味に加えて、「……を [……だと] 確信している」(ジー) という意味でも用いられる。これは「絶対／きっと／どうせ……だと思おう」という感じである。次の例を参照：

- (61) I just know I won't get the job. (LDCE<sup>3</sup>)  
 (その仕事に応募したが、絶対採用されないと思っている／採用はまず無理だと思っている)
- (62) I knew you'd say that. (LDCE<sup>3</sup>)  
 (どうせそう言うと思っていました)
- (63) Everyone else believes him, but I just know (that) he's lying. (MWALED)  
 (他の人は皆彼の言っていることを信じているが、私は彼はきつとうそを

ついていると思っている)

(64) I don't know that I can finish it by next week. (OALD<sup>9</sup>)

(来週までにやり終わられる自信はないな)

(65) I knew I had to survive. (Web)

(ここで死んではいけない／ここで死ぬわけにはいかないと思った)

(65) は地震による雪崩が発生しエベレスト登山者が死傷した事故で、生存者の一人であるシェルパのガイドが雪崩発生時の極限的な状況に関して述べたものである。また、次の (66) は傷ついてやせ細った状態でひとりであるところを発見された猫を保護しようと思った話者の発言である：

(66) We knew we needed to help her. (Web)

(このまま放っておくのはかわいそうだ。これは何とかしてやらないといけないと思った)

これらの know は知識や自覚を表す叙実動詞 (factive verb) ではなく、話者の強い確信を表す非叙実動詞 (non-factive verb) として解釈するのが適当である。

## leave

動詞 leave は後に目的語＋補語をとった場合、その意味は「(人・事が) (人・物・事) を……のままにしておく [する], ……の状態にしておく [する]」(ジー) と記述されるが、leave が本来表す「対象から去る／離れる」という意味がこの用法にも関与していると考えられることがある。その場合、S leaves X A の意味は「S は X を A の状態にし／S の結果 X は A の状態になり、S は (X のもとを) 去る／離れる」と特徴づけるのが妥当である。次の例を参照：

(67) Leave the door open, please. (OALD<sup>9</sup>)

(このドアは開けたままにしておいていただけますか。よろしく願います)

(67) は S (=leave する主体 (=発話の相手)) が初めは X (=the door) の所にいて、X を A (=open) の状態にしておき、その後 X から (空間的または心理的に) 離れることを S に求めているものである。次の例も同様である：

(68) The bomb blast left 25 people dead. (OALD<sup>9</sup>)

(爆弾の爆発により／爆弾が爆発した結果 25 人が死亡した)

(69) Airport and road closures have left thousands of travelers stranded.

(Web)

(空港と道路が閉鎖されてしまったため、何千人もの人たちが動けなくなってしまった)

(70) The accident has left me disabled for life. (Web)

(その事故のせいで／その事故の結果、私には一生治らない障害が残った) これらの場合、SによってXがAの状態になったが、Sそのものは一時的に生じたものであり、時間的にすぐ(Xのもとを)去ってしまったことを表している。(70)のような事故や病気などの後遺症を表す表現においてS leaves X Aの形がしばしば用いられる。

### realize

動詞 realize は「(事)をはっきりと理解する、悟る」「(実感として)……だと[……かが]よくわかる」(ジー)と定義されている。この語は別の動詞 notice との意味用法の違いが問題になることがあるが、notice が用いられるのは「(対象を直接見たり聞いたりすることにより)対象の外面に関する事柄に気づく」という場合が基本であるのに対して、realize は「対象の外面以外に関する事柄に気づく／を知る」という場合が基本である。次の例を見てみよう：

(71) I couldn't help noticing (that) she was wearing a wig. (OALD<sup>9</sup>)

(彼女がかつらをつけていることに気づかないわけはなかった)

(72) The moment I saw her, I realized something was wrong. (OALD<sup>9</sup>)

(彼女を見た瞬間、何かがおかしいと気づいた)

(71) は対象 (“she”) を直接観察することによりすぐにその外面的／具体的な事柄 (= 観察対象がかつらをつけていること) に気づいたことを表すが、(72) は対象 (“she”) を観察したときにその対象の外側／表面以外に関する事柄 (= 観察対象に関して何か普通と違うことがあること) に気づいたということである。

realize は「対象との(最初の)外面的接触によっては気づかない／気づかなかった事柄に気づく／を知る」という場合によく用いられる。次の例を参照：

(73) I realized that she was married.

((その人の配偶者のことが話題になって)「あっ、この人結婚してたんだ」と思った)<sup>(11)</sup>

(74) I didn't realize that you are a fiction writer.

((あるとき書店にその人の本が並んでいるのを見かけて)あなたが小説家だったと初めて知りました。まさかそうだとは思いませんでした)

(75) I didn't realize that he was such a comedian. (Collis 1994: 53)

((最初は全然そう見えなかったが) 彼はこんなにおもしろい人だったんだ。  
そうだとは思わなかった)

(73)–(75) はすべて、対象の外側／表面からは知りえなかったことについて後から(何らかの形で)情報を得て知ったことを表している。その際、知った内容は一時的な現象に関するものではなく永続的・構造的な事柄である。

### recognize

動詞 recognize は「(人が) (……によって／……だと) (人・物・事) を (それと) わかる, 認識 [識別] する (identify)」(ジー) と定義されている。この語は上述の identify との区別が問題になることがあるが, recognize は「過去に見聞きしたことの記憶・経験からそれとわかること」(ジー) を表す。これは「言語外の事物 X とカテゴリー A との対応関係が主体である S にとって既知である場合, S が X に接した際それが A であると認識する」ということである。次の例を見よう:

(76) (=53) The bodies were identified as those of two suspected drug dealers. (OALD<sup>9</sup>)

(それらの遺体は鑑定の結果, 麻薬密売の容疑者 2 人のものと確認された)

(77) I recognized her by her red hair. (OALD<sup>9</sup>)

(その女性は赤毛だったので, それが彼女だとわかった)

(76) の identify を用いた例は言語外の事物 X (=それらの遺体) が複数のカテゴリー候補  $A_1, A_2, \dots, A_n$  (=可能な複数の人物の遺体) から抽出された A (=麻薬密売の容疑者 2 人の遺体) と対応関係をつけられたことを意味するのに対して, (77) の recognize を用いた例は初めからその女性 (=X) が彼女 (=A) であることが自分 (=S) にとって既知であり, X を見たとき X の特徴を手がかりとしてそれが A であることを認識したということである。次の例も同様である:

(78) Cats recognize their own names. (Web)

(猫は自分の名前を呼ばれたときそれが自分の名前だとわかる)

(79) If you came here 10 years ago, you wouldn't recognise the city anymore ... (BBC (Web), 14 July 2016)

(ここ (=ウィーン) に来たのが 10 年前なら, (それから街が大きく変わったので) もはやこれがあのウィーンだとは思えないでしょう / 同じ街だ

とは思えないでしょう)

このように, recognize と identify は言語外の事物とカテゴリーとの対応関係のあり方と, その対応関係が主体にとって既知であるか否かという点で違いがあると言える。

### report

動詞 report は「(物・事)を(人に)報告する, 知らせる」「(当局などが)……を発表 [公表] する」「(新聞・テレビ・記者などが) (物・事)を [……したことを] (取材して) 報道する, 伝える」「(犯罪・事件など)を(警察など)に通報する, 届け出る」(ジー)などと定義されているが, S reports A (to B) には「SがA(情報や物)を(Bに)伝える/届けることが(当然のこととして)期待/要求されている」という前提がある。次の例を見てみよう:

(80) She reported the wallet to the police station.

(彼女はその財布を警察署に届けた)

(81) The crash happened seconds after the pilot reported engine trouble.

(OALD<sup>9</sup>)

(その墜落事故は機長がエンジントラブルを報告した数秒後に起こった)

これらにおいて動詞 report が用いられているのは, それぞれ「財布などの拾得物は警察に届けることになっていること」, 「フライトでトラブルが生じたら機長が(管制塔などに)報告する義務があること」がその理由である。次も同様に考えられる:

(82) The neighbours reported seeing him leave the building around noon.

(OALD<sup>9</sup>)

(近所の人たちは彼が正午ごろその建物から出るのを見たと言った)

(82) の場合, たとえば警察から「もしその人を見かけたら知らせてください」と要請を受けていて, その要請に応じて情報を提供したということである。同様に, 「調査・アンケートなどに対して情報の提供をする」という場合も report を用いることができる:

(83) All 23 students who took the survey reported liking Ms. Bess's course.

(Schweber 2004: 99)

(調査に答えた23名の生徒全員がベス先生の授業が好きだと回答した)

(83) は調査・アンケートの実施者がその対象者に情報の提供を求め, 対象者が求

めに応じて情報を提供したということである。このような場合、日本語の訳語としては「報告する」よりもむしろ「回答する、答える」の方が適当であろう。

## respect

動詞 respect の意味は「(人)を(……に対して/……として)尊敬する、敬う」「(人の意見・考えなど)に敬意を払う」「(人の願望・権利など)を尊重する、重んじる」と記述されているが、日本語で「尊敬する」と言う場合それをそのまま respect で置き換えた英文を作ると不適切になることがある<sup>(12)</sup>。ここでは S respects A の意味を、「S が A の持つ価値を認め、A をそのような価値を持ったものとして扱い、それ未満のものとしては扱わない」とすることを提案する。次の例を見てみよう：

(84) Factory owners and industrialists did not respect immigrant workers. They looked at immigrant workers as a machine and not as human beings. (Web)

(工場の所有者や産業経営者は移民の労働者をまともなものとして扱わなかった。彼らは移民労働者を(単なる)機械と見なし人間とは見なさなかった)

(84) は S (= 工場の所有者や産業経営者) が A (= 移民労働者) が本来人間として持っている価値を認めず、人間扱いしなかった/機械として扱っていたということである。次の例も同様に考えられる：

(85) Grudgingly, Japan is starting to respect its neighbors. "Until now, Japanese saw China and India as backwards and poor ... As Japan loses confidence in itself, its attitudes toward Asia are changing. It has started seeing India and China as nations with something to offer."

(*The New York Times* (Web), January 2, 2008)

(不承不承ながら、日本はアジアの隣人たちを一人前の国として扱うようになってきた。「これまで日本人は中国やインドを貧しい後進国と見なしてきました……日本が自国に対する自信を失うにつれて、アジアに向ける眼も変わりつつあります。日本はインドや中国を価値あるものを持った国と見なすようになってきたのです」)

(85) は S (= 日本) が A (= 中国やインド) が現在持つ価値を認め、その価値未満のものを見なす態度をとらないようになってきたということである。

respect は名詞としても用いられるが、その意味は動詞の場合と平行したものである。次の各例を参照：

- (86) Japan won wars against China and Russia, gaining territory and international respect. (Web)

(日本は日清・日露の戦争に勝利し、領土を得て世界から「日本はアジアの小国と思っていたが、見直した。これは大したものだ、これはなめてはいけない」と思われるようになった／一目置かれる存在になった)

- (87) There are rules you need to learn to be effective in Japan, and if you don't learn them, you will simply not get the respect of your team.

(BBC (Web), 23 August 2016)

(あなた(外国人)が日本で活躍するために学んでおく必要がある(日本の企業社会の慣習に関する暗黙の)ルールがあります。それを知らなかったら、自分の職場のチームの同僚たちから一人前の存在／対等な存在として扱ってもらえません)

- (88) At work, women often take it personally when someone disagrees with them or openly argues. An engineer who was the only woman among four men in a small company found that she had to be willing to take her colleagues on in animated argument in order to be taken seriously. Once she had done that, they seemed to accept and respect her.

(Tannen 1994: 60)

(職場では、女性は誰かに反対意見を述べられたり表立って反論されたりすると自分個人への攻撃であると受けとってしまうことが多い。あるエンジニアの女性は、社内で女性は自分だけで、他は男性社員が4人という小さな企業に勤めているが、自分が社内でまともに相手にされるためには同僚の男性たちを相手に活発な議論をすることをいやがってはいけないことがわかった。いったんそれをやったら、彼らは自分を受け入れ自分を一人前の存在／対等な存在と見なすようになったようである)

最近日本語では英語からの借用語である「リスペクト(する)」という語が用いられているが、これは「尊敬(する)」よりも語感が軽く、(87)(88)のような場合の日本語訳として用いるのに適当であるかもしれない。

**scorn**

動詞 scorn は「(人・物・事)を(……として)軽蔑する, ばかにする」「(助言・申し出など)を(軽蔑して)はねつける, ……することを(軽蔑して)拒絶する」(ジー)と定義されているが、「軽蔑」の対象についてももう少し詳しく述べると、S scorns A の意味は「A が価値を持たないものであるかどうかにかかわらず、S は A を価値を持たないものと見なし、A を受け入れる/A と関わり合いを持つことを拒否する」と特徴づけることができる。例を見てみよう：

(89) She scorned their views as old-fashioned. (OALD<sup>9</sup>)

(彼女は「彼らの考えは古くさい」と言って相手にしなかった)

(90) He scorns anyone who earns less money than he does. (MWALD)

(彼は自分より稼ぎが少ない連中のことを「ツマラン奴らだ」と言ってばかにしている/自分より下の存在だと思っている)

これらにおいて、A が本質的に価値がない/軽蔑に値する存在であるかどうかは別問題で、S が A に価値を認めないという態度をとっているという点が重要である。次の例も参照：

(91) So does he respect the press and media, or does he secretly scorn them?

(CALD)

(では彼は報道機関やメディアの価値を認めているのだろうか。あるいは心の中では「フン、あんなもの」と思っているのだろうか)

(92) She scorned all my offers of help. (CALD)

(私が何回も「お手伝いしましょうか」と声をかけたのに、彼女は「いいえ結構です。あなたに手伝っていただくことはありません」と言って断った)

(93) She scorned his invitation. (MWALD)

(「そんなのいやだわ」と言って彼女は彼の誘いを断った)

(94) My parents scorn convenience food.

(私の両親は「インスタント食品なんていらんよ。あんなの食べ物じゃない」と言って口にしようとしな)

これらのうち (92)–(94) の場合は、「価値を認めないものを拒絶する」という意味が焦点化されていると言える。

## will

助動詞 will の用法は意志 (volition)・予測 (prediction)・予測可能性／習性 (predictability/habit) に大別される<sup>(13)</sup>。この語は他の助動詞の can や must などと異なり日本語の定訳が存在せず、ある用例における解釈の表現が他の用例にも拡張されてしまうことがある点に注意する必要がある。次の例を見てみよう：

(95) Tomorrow's weather will be cold and cloudy. (Leech 2004: 57)

(明日は曇りで寒くなるでしょう)

(95) は「予測」の用法であり、この場合は事態の性質上不確実性の含みがあるため、「……だろう／……でしょう」と訳すことはさしつかえないが、これを同じ用法のすべての例に当てはめることはできない。次の例を参照：

(96) If you press this button, the roof will slide back. (Leech 2004: 57)

(このボタンを押すと、屋根が後ろにスライドします／スライドして元の位置に戻ります)

(97) The next station is Hachioji. The doors on the right side will open.

((電車の車内のアナウンスで) 次は八王子です。右側のドアが開きます。)

(96)(97) も「予測」の用法であるが、これらはいずれも確実性の高い事態を表すため、(95) のように「……だろう／……でしょう」とするのは不適切である。これらの場合は日本語としては「……する／します、……になる／なります」となり、will は日本語訳には直接現れない形になる。

上に挙げた will の例はいずれも既存の知識や予定に基づいてある事柄を予測する場合であったが、will には新たに得られた情報に基づいた予測を表す場合もある。次の例を見よう：

(98) If I will be late, I will call you. (ピーターセン 1990: 124)

(遅れることになったら、電話する)

(99) Scotland will remain part of the United Kingdom — along with England, Wales and Northern Ireland — following a historic referendum vote.

(*CNN*, September 19, 2014)

(歴史に残る住民投票の結果、スコットランドは—— イングランド、ウェールズ、北アイルランドとともに—— イギリスの一部であり続けることになった)

(98) の if 節の will および (99) の will はともに新たな状況の変化に基づく予測を述べたものであり、「ニュースの will」と呼んでよいものである。これらも (96)

(97)と同様に表される事態の確実性は高いので、「……だろう／……でしょう」と訳すのは適当ではなく、日本語では(96)(97)と同様単に「……する／します、……になる／なります」とするか、あるいは根拠となる情報の新規性を加味して「……することになった」と訳すのが適当であろう。

### willing

形容詞 willing は叙述用法で用いられたとき、その意味は「……するのをいとわない、……してもかまわない」(ジー)と記述される。この形は「自分から積極的にしたいというのではなく、特に反対する理由もないので同調の態度をとる時」(ジー)に用いられ、「それをする(気がある)かどうか問われたら／それをするように要請されたら、それをするのはいやではない／それをするのを拒否することはしない」ということである<sup>(14)</sup>。次の例を参照：

(100) They keep a list of people (who are) willing to work nights. (OALD<sup>9</sup>)  
(彼らは夜勤可／夜勤 OK の従業員のリストを持っている)

(101) You said you needed a volunteer — well, I'm willing. (CALD)  
(ボランティアが必要だと言っていましたね——あ、(何なら)私やってもいいですよ)

(100)(101) はいずれもそれをすることを積極的に希望するというのではなく、「(お願いできますかと)言われたらやります」という気持ちを表している。

willing は通常主体の意思による選択が可能であることを表し、「それをしないという選択もできるが自分はそれをするを選択してもよい」ということを意味するが、次のように助動詞の must や準助動詞の have to とともに用いられた場合はこの限りではない：

(102) Candidates must be willing to travel and be assigned abroad. (Web)  
(採用の候補者は海外出張・海外赴任には必ず応じなければならない)

(103) If you really want to change your life, you have to be willing to make decisions—sometimes difficult ones. (Lewis 2012: 74)  
(本当に自分の人生を変えたいと思ったら、決断——時には難しい決断——をすることを厭ってはならない)

(102)(103) はいずれもその事柄についての「拒否の禁止」を表し、主体の意思による選択が許容されないことを示している<sup>(15)</sup>。

### 3. 結語

本稿では、学習英和辞典の内容の補完として、いくつかの語の意味解釈・意味分析・訳の提案や非概念的内容の表示を採り入れた記述を行なった。ここで扱ったのはわずか20語であり、すべて基本語であるが、英語学習者を辞書に記載された訳語から英語母語話者の言語感覚へ多少なりとも近づけることができれば本稿の試みは意義があったことになるであろう。英語学習における日本語の介在の是非はしばしば問題になることであるが、介在を容認する場合はどのような形が望ましいか検討することが大切である。ここでの考察がそのための一つの材料となることを望みたい。

### 注

1. 本稿では例文に日本語による意味の説明を付すが、それは必ずしも例文の日本語訳ではないことに注意されたい。
2. The book is about the history of Japan. (その本は日本の歴史に関する本です) のような場合、S (=The book) の主題が A (=the history of Japan) であることになるが、あるものの「主題」とはそれが扱っている事柄の「中核的要素」であると考えられるので、この場合もここで示した S is (all) about A の意味解釈に準じるものと見なすことができる。要するにこの形式は、S が The book のような言語的事物 (= 言語によって構成された事物) であるかどうかは問わないということである。
3. このような主語の名詞句が指し示す事柄の中核的内容を示しそれを定義するという関係は、動詞 involve を用いて表すこともできる。友澤 (2017) を参照。
4. この S affects A はパラフレイズすると S causes A to suffer (from) S ということになる。
5. 中村 (2002: 62) および中村 (2008: 27) は、available は女性について「陥落しやすい (簡単に口説き落とせる)」の意味で用いられると述べているが、その用法もここで示した available の意味から説明できる。また、パルパース / 上杉 (2001: 135) は The most available person to marry is not always the most desirable. (一番手頃な結婚相手が、必ずしも一番望ましい人ではない) という例において、「available な花嫁や花婿とは、結婚に同意したと思われる人」(ibid.: 136) と説明している。これも「結婚してほしいという求めに応じた / 応じられるという意味を示した」という意味であると考えられることができる。
6. この場合、言われた方は「私の予約の内容は確かなものです / 私は予約を取り消しません」と述べることになる (すなわち、この場合 confirm する主体は「予約をしたいと言いつ出した側」である)。
7. 発話行為動詞としての explain については、友澤 (2008) を参照。

8. 小西 (1980: 678, 682) を参照。なお, suppose もこの guess と同様に用いられる。
9. この場合, I suppose so. と答えても同じである。ミントン／安武内 (1999: 153) を参照。
10. この場合の「指示対象」はより具体的には「その関係節の先行詞と関係づけられる名詞句の指示対象」である。
11. この日本語では「……と思った」としてあるが, realize は叙実動詞なのでその「思った」内容が事実であることが前提とされる。この場合, realize の代わりに非叙実動詞の think を用いたらそのような前提はない。
12. パルバース／上杉 (2001: 163, 164) によると, たとえばある男性が妻を連れて気難しいことで有名な博士の家を訪ねて, 男性が博士に「家内は先生を大変尊敬しております」と英語で言う場合, respect を用いるのは不適切で, admire を用いるのが適切であるとのことである。
13. Leech (2004: 85-88) および安藤 (2005: 295-301) を参照。
14. このような叙述用法の willing が表す「主体の消極性」については, 最所 (1981: 55), パルバース／上杉 (2001: 75), および中村 (2008: 266) を参照。ただし, CALD は be willing (to V) を “to be happy to do something if it is needed” と定義しており, 主体はそれを行なうことについてたとえ消極的であってもいやいや行なうわけではないことに注意する必要がある。
15. (102) は求人広告において勤務条件を述べたものであるが, こういう場合日本語だと単に「(この職は) 海外出張・海外赴任があります」と記されて「拒否の禁止」が含意されることがある。

## 例文出典

Collis, Harry (1994) *101 American English Idioms: Understanding and Speaking English Like an American*. Lincolnwood, Illinois: Passport Books.

Lee, David. (2001) *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Oxford: Oxford University Press.

Lewis, Allyson (2012) *The 7 Minute Solution: Time Strategies to Prioritize, Organize & Simplify Your Life at Work & at Home*. New York: Simon and Schuster.

マーク・ビーターセン (1990) 『続 日本人の英語』東京：岩波書店。

Schweber, Simone (2004) *Making Sense of the Holocaust: Lessons from Classroom Practice*. New York: Teachers College Press.

Tannen, Deborah (1994) *Talking from 9 to 5: Women and Men in the Workplace: Language, Sex and Power*. New York: Avon Books.

ジー＝『ジーニアス英和辞典第5版』

CALD = *Cambridge Advanced Learner's Dictionary*, 3rd edition.

Collins = *Collins COBUILD Advanced Dictionary of English*, 7th edition.

LAAD = *Longman Advanced American Dictionary*.

*LDCE* = *Longman Dictionary of Contemporary English*, 3rd edition.

*MWALED* = *Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary*.

*Newbury* = *The Newbury House Dictionary of American English*.

*OALD*<sup>4</sup> = *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, 4th edition.

*OALD*<sup>6</sup> = *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, 6th edition.

*OALD*<sup>9</sup> = *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, 9th edition.

## 参考文献

安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 東京：開拓社。

小西友七 (編) (1980) 『英語基本動詞辞典』 東京：研究社出版。

Leech, Geoffrey (2004) *Meaning and the English Verb*, 3rd ed. Harlow: Pearson Longman.

ミントン, T. D. (著) / 安武内ひろし (訳) (1999) 『ここがおかしい 日本人の英文法』 東京：研究社出版。

中村保男 (2002) 『新編 英和翻訳表現辞典』 東京：研究社。

中村保男 (編) (2008) 『英和翻訳表現辞典 基本表現・文法編』 東京：研究社。

ロジャー・バルバース / 上杉隼人 (2001) 『ほんとうの英語がわかる — 51 の処方箋 —』 東京：新潮社。

最所フミ (1981) 『英語の習得法』 東京：研究社出版。

友澤宏隆 (2008) 「発話行為動詞の that 節補文の意味的性質について」 『言語文化』 45 巻, 35-48. 一橋大学語学研究室。

友澤宏隆 (2017) 「定義文に用いられる involve について」 『言語文化』 53 巻, 3-16. 一橋大学語学研究室。